【332】

氏　名（本籍）	長沼圭一（ながぬまけいいち）（静　岡　県）
学位の種類	博　　士（言　語　学）
学位記番号	博　乙　第　1889　号
学位授与年月日	平成15年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	フランス語における有標の名詞限定の文法 －普通名詞と固有名詞をめぐって－

主　査	筑波大学教授	文学博士	古川直世
副　査	筑波大学教授	Ｐｈ．Ｄ．	中右　實
副　査	筑波大学助教授	ＤＬ	青木三郎
副　査	筑波大学助教授	文学博士	廣瀬幸生
副　査	筑波大学助教授	Ｐｈ．Ｄ．	竹沢幸一

論文の内容の要旨

本論文は，現代フランス語において有標と見なされる，限定詞を伴わない普通名詞（以下，無冠詞名詞句）および限定詞を伴った固有名詞を研究対象としている。序章においては，本論における重要なキーワードとなる概念について解説が行なわれ，第1章から第4章においては無冠詞名詞句，第5章と第6章においては限定詞付きの固有名詞について論じられている。

第1章は，コピュラ文の属詞として現れる無冠詞名詞句を扱っている。フランス語においては，職業，身分などを表す名詞句は属詞の位置では通常無冠詞で現れるが，単に職業を言い表す読みだけでなく，「～らしさ」という読みも可能である。これら二つの読みの差異は，ある論者が主張するような「部分的形容詞化」であるか「全体的形容詞化」であるかの違いではなく，「役割記述機能」が働いているか「性質記述機能」が働いているかの違いである，ということが主張されている。

性質記述機能は人を表す名詞であれば比較的容易に働くが，役割記述機能が働くためには，名詞の表す役割が境界線のはっきりしたカテゴリーとしてあらかじめ設定されていなければならず，このカテゴリーは他のカテゴリーとパラダイムをなすことを前提とする。また，役割記述機能を持つ名詞が属詞位置で無冠詞で現れる理由の一つとして，カテゴリーに付与されている一種の「ラベル」からの転用という理由が挙げられている。

第2章では，同格として現れる無冠詞名詞句についての考察が行なわれている。名詞を支えとする同格は，右方同格と前方同格の二つに分類されている。

無冠詞の右方同格は，関係節の関係代名詞とコピュラが省略されたものではなく，統辞構造的には未決定なものである，と主張する。したがって，先行する支えに言語内レベルで直接結びつくのではなく，その支えによって導入された言語外の人や物に結びつく，とする。すなわち，右方同格は具体的な個体に対する一種のラベルとして機能する。また，この個体との結びつきしか想定されないため，客観的，定義的属性が表れやすい，と観察する。

一方，前方同格は，「形式的支え」と「実質的支え」という二つの支えを持つ，という分析を提示する。すなわち，前方同格に後続する主語位置の名詞句あるいは代名詞は形式的支えに過ぎず，実質的支えは前もって発話の

テーマとして与えられている。前方同格はこの実質的支えによって導入された言語外の人や物と結び付く。したがって，前方同格もラベリングを行っているが，後続文につなげるための新たな視点を導入しているため，支えとなる人や物の非本質的属性を記述していることが多い，と観察する。前方同格は，後続文との間での意味解釈が曖昧であり，意味構造的に未決定なものである，と結論づけている。

第3章では，＜φN,…＞構文に現れる同格的な働きを持つ無冠詞名詞句（文同格）および＜φN：…＞構文に現れる標題的な働きを持つ無冠詞名詞句（文タイトル）について考察が行なわれている。

文同格は，基本的には命題に対する発話者の心的態度を表す。文同格として現れる名詞句は，指示機能を持たず，純粋に記述的に機能する。文同格は後続文の内容に対する評価を後から行っているため，談話の流れとは逆に後続文の方が前提として存在する。また，統辞的にも意味的にも文副詞に近く，副詞的方向に脱範疇化した名詞句である，と分析する。

一方，文タイトルは先行文脈によって与えられた枠組みを表しており，その内容は後続文によって後から与えられる。文タイトルとして現れる無冠詞名詞句は，話者あるいは筆者によるラベリングによってタイトル化され，いわば即席の固有名詞として機能する。しかしながら，その一方で，いくつかの文タイトルは，接続詞的に解釈され，名詞からの脱範疇化の傾向が見られる，とする。このような文タイトルは，名詞から接続詞へ移行する文法化の途中の段階に置かれているものである，と分析する。

第4章では，単独で一つの発話をなす無冠詞名詞句について考察され，このような独立した無冠詞名詞句が一種のラベルとして機能する，ということが主張されている。

独立無冠詞名詞句の多くはC'est Dét N, Voil à Dét N, Il y a Dét N, Dét N est Attrのいずれかによってパラフレーズされる，とする。このようなパラフレーズが可能な場合，独立無冠詞名詞句の指示対象は，先行文脈によって描写された言語外の世界に存在する。このような独立無冠詞名詞句は，描写の後で命名を行っており，絵のタイトルと類似する，と分析する。

一方，後続文脈によって指示対象が与えられる独立無冠詞名詞句の存在も指摘されている。これらの独立無冠詞名詞句のほとんどは，上の4つのパラフレーズがいずれも困難である，とする。このタイプの独立無冠詞名詞句は，後続文脈の要約である「中身のラベル」と後続文脈のカテゴリーを示す「種類のラベル」に分類され，いずれの場合も，指示対象は言語的情報であり，範囲が比較的明確に限定される。このような性質は，新聞の見出しや本のタイトルに近いものである，と見る。

第5章では，不定冠詞を伴う固有名詞un Npを中心に，固有名詞が隠喩的解釈を獲得するメカニズムについて論じられている。不定冠詞付きの固有名詞が隠喩的に用いられている場合，固有名詞は本来の指示対象を指示するのではなく，本来の指示対象が持つ性質を記述する。したがって，この場合，固有名詞において本来優勢である指示機能が抑えられ，記述機能が前面に出る。また，定冠詞複数を伴う隠喩的解釈の固有名詞les Npにおいても，固有名詞の記述機能が前面に出る，と観察する。したがって，限定詞には固有名詞に内包を付与する働きがある，と結論づける。

この内包付与の働きの根源的なものは部分冠詞duである，とする。部分冠詞の性質上，du Npは連続的なものとして捉えられなければならないため，固有名詞の本来の指示対象が持つ性質を表している，と解釈する。隠喩的解釈の固有名詞においては，このdu Npが前提となってun Npが生じ，さらにこのun Npが積み重なることによってles Npという集合が構築される，という論理的前後関係が想定されている。

第6章では，定冠詞を伴う隠喩的解釈の固有名詞le Npについて論じられている。通常この種の固有名詞は補語を伴いle Np Expの形で現れる。ここで用いられている定冠詞は，補語の存在によって現れるものであるが，それによって厳密に唯一的な個体が同定されることが保証されているわけではない，と見る。このようなle Np Expは，ある値を指示するという指示機能よりも，固有名詞の内包を前面に出すという記述機能の方が優勢に働く。したがって，この場合の定冠詞の用法は，「役割」指示的用法，あるいは「準内包的用法」に準ずるものであると，す

る。しかしながら，補語を伴わないle Npの形で用いられる固有名詞もわずかながらあり，この場合は純粋な「内包指示的用法」である，と分析している。

本論文の大きな主張は，現代フランス語における限定詞を伴わない普通名詞および限定詞を伴う固有名詞という二つの有標の現象の分析を通して，言語分析においてしばしば混同されがちな言語内レベルと言語外レベルというふたつのレベルの峻別の重要性を強調する点にある，と言えよう。

審査の結果の要旨

普通名詞にかかわる限定詞の欠如という現象に関して，先行研究の多くは，動詞成句などのいわゆる凝結語法における場合の問題を扱ってきたにすぎない。本論文の独創性をなす点は，まず，凝結語法のような個々の要素の観察が困難なケースではなく，限定詞のパラダイムと対立しうる限定詞の欠如を扱っている点にある。さらに本論文の独創性をなすもうひとつの点は，普通名詞にかかわる限定詞欠如の現象といわば鏡像関係にある，限定詞を伴う固有名詞という有標の現象を扱っている点にある。これらの発想上の独創的な点から出発して，本論文は，ふたつの現象を，言語内レベルと言語外レベル，指示機能と記述機能，役割と値，内包と外延，という対概念によって記述，説明することに成功している。これらの概念の中でもとりわけ，内包という概念からのアプローチは，本論文のテーマをなす名詞句にかかわる現象に関して極めて有効なアプローチであることが説得的に示されている。

本論文にさらに求められるものがあるとするならば，普通名詞にかかわる限定詞欠如という現象に関して，さらにほかにも存在する具体的な事例の記述，説明が期待される点である。しかしながら，このような期待は，本論文の原理的な記述，説明自体を何ら損なうものではなく，総じていえば，本論文がこの分野の研究において学界に寄与するところ大であると高く評価される。

よって，著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。